

波佐見町文化財調査報告書 第1集

山 角 遺 跡

昭和 56 年 3 月

長崎県東彼杵郡波佐見町

波佐見町教育委員会

III 山角遺跡

—東彼杵郡波佐見町所在—

例　　言

1. 本書は、昭和47年、東彼杵郡波佐見町内で行われた村木川変流工事にさきだって実施した山角遺跡緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は長崎県教育委員会主催のもとに、県文化課指導主事正林謙・学芸員補(当時、現上任文化財保護主事)田川肇が担当し、県文化財保護員(当時、現文化財保護指導委員)井手寿謙氏の参加を得て実施した。
3. 本書作成については正林が担当執筆したが、遺物実測等の作業については県文化財保護主事藤田和裕の助勢を受けた。
4. 本書の編集は正林による。
5. 本書の図面中、遺構については15分の1に縮尺し、遺物については3分の1に縮尺したもの用いた。
6. 本遺跡の出土遺物は、現在県文化課が保管しているが、近く、遺跡所在地の波佐見町教育委員会に移管の予定である。
7. 本遺跡の調査から10星霜を経たが、調査記録の公刊が遅延したことについて、大方の寛恕を得たい。

本文目次

	Page
1.はじめに	155
2.山角遺跡の位置と環境	155
3.調査	157
上層と遺物の概況	157
土器	159
石器	164
4.多良山塊の縄文中期遺跡	175
5.滑石と縄文式土器	178

挿図目次

Fig. 1 波佐見町位置図	154
Fig. 2 山角遺跡位置図	156
Fig. 3 山角遺跡および試掘域設定状況図	158
Fig. 4 出土土器①	160
Fig. 5 出土土器②	161
Fig. 6 出土土器③	162
Fig. 7 出土土器④	163
Fig. 8 出土石器①	165
Fig. 9 出土石器②	167
Fig. 10 出土石器③	169
Fig. 11 出土石器④	171
Fig. 12 出土石器⑤	172
Fig. 13 出土石器⑥	173
Fig. 14 出土石器⑦	174
Fig. 15 出土石器⑧	175
Fig. 16 県内縄文中期土器出土地分布図	176

表目次

Tab. 1 県内縄文中期土器出土地一覧表	177
-----------------------	-----

図 版 目 次

	Page
PL. 1 道跡	180
PL. 2 調査風景・土層	181
PL. 3 出土土器①	182
PL. 4 出土土器②	183
PL. 5 出土土器③	184
PL. 6 剥片石器①	185
PL. 7 剥片石器②	186
PL. 8 剥片石器③	187
PL. 9 剥片石器④	188

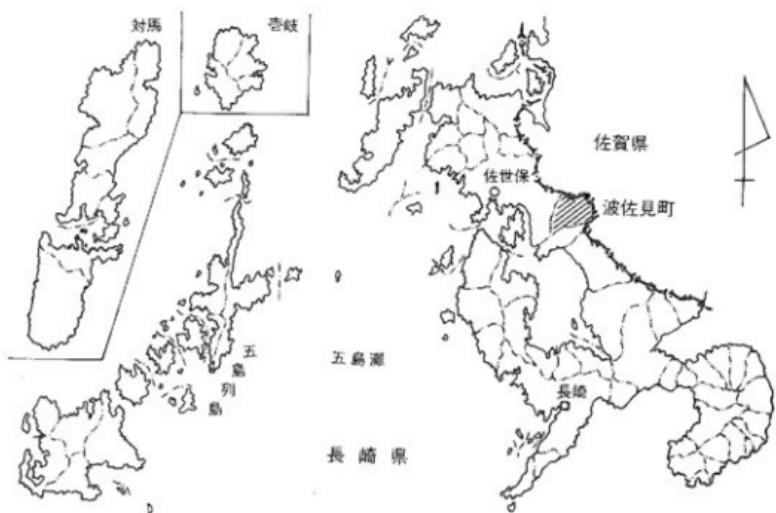


Fig. 1 波佐見町位置図

1. はじめに

村木川は、波佐見町のはば中央部を流れる波佐見川の一支流であり、狭長な谷を濶して蛇行している。村木川の蛇行部を直線化して耕地の水害を防ぐ変流工事が圃場事業の一環として昭和47年度に計画されていた。村木川が波佐見川に合流するあたりは最も蛇行著しい部分であり、三角洲状に西側から張り出す平坦地を奔流が闊闊と襲っていたといわれる。当該変流工事は、1.5haの梨園の山際を南北に断ち切って、村木川の流路を直線化する計画であった。

一方、この三角洲状に張り出す梨園は、全国遺跡地図長崎（昭和51年文化庁刊）に25—47として記載された山角遺跡（散布地）があり、從前、縄文時代中期の土器片等が採集されており、いわゆる周知の遺跡包蔵地があった。

県農林部耕地課・同土木部河川砂防課・波佐見町担当課と県文化課は、当該遺跡の取扱いについて協議をもち、第1段階として、遺跡の包蔵状態存否、包蔵範囲等を確認することとした。包蔵状態が確認された場合は、あらためて発掘調査の実施について協議をすることとし、協約書を県関係課間で交換した。

調査は、川棚地区の堤防欠陥場所の補修工事にかかる五反田遺跡の調査（本報所収）に引続いて、昭和47年10月6日～9日の三日間実施した。調査は県文化課指導主事正林謙・学芸員補（當時、現主任文化財保護主事）田川肇の担当で実施し、県文化財保護員（當時、現文化財保護指導委員）井手寿謙氏の参加を得た。

2. 山角遺跡の位置と環境

山角遺跡は長崎県東彼杵郡波佐見町稗木場郷字下春田にある。波佐見町は、大村湾東部地域にあって、本県では数少ない「海岸をもたない町」であり、北辺は佐賀県有田町、東辺は同県武雄市と嬉野町、西辺は佐世保市、南辺は川棚町に接する。

波佐見町のはば中央は波佐見盆地であり、町の穀倉地帯で多くは水田が営まれている。この波佐見盆地の中央を東南方向に波佐見川が流れ、川棚川となって南流し、大村湾に注いでいる。波佐見川には、盆地周辺の山地からの支流が多く合流しており、支流の流域には狭長な水田地帯となっている。水源涵養を目的とした溜池群は、これら支流群の谷頭に営まれて水田用水として利用されている。本遺跡調査の発端となった変流工事が計画された村木川も、これら支流群の一つであり、県道嬉野・佐世保線と南北に直交して波佐見川に合流している。合流地点付近は波佐見盆地の中でも最も開けた水田地帯であり、村木川と皿山川と波佐見川の合流地点でもある。

この波佐見盆地は、町の農業の中心地であるとともに、交通の要路でもあり、西方の佐世保市・北方有田町（佐賀県）・東方武雄市（佐賀県）・南方川棚町方面に向う十字路の役目を果た

山角遺跡

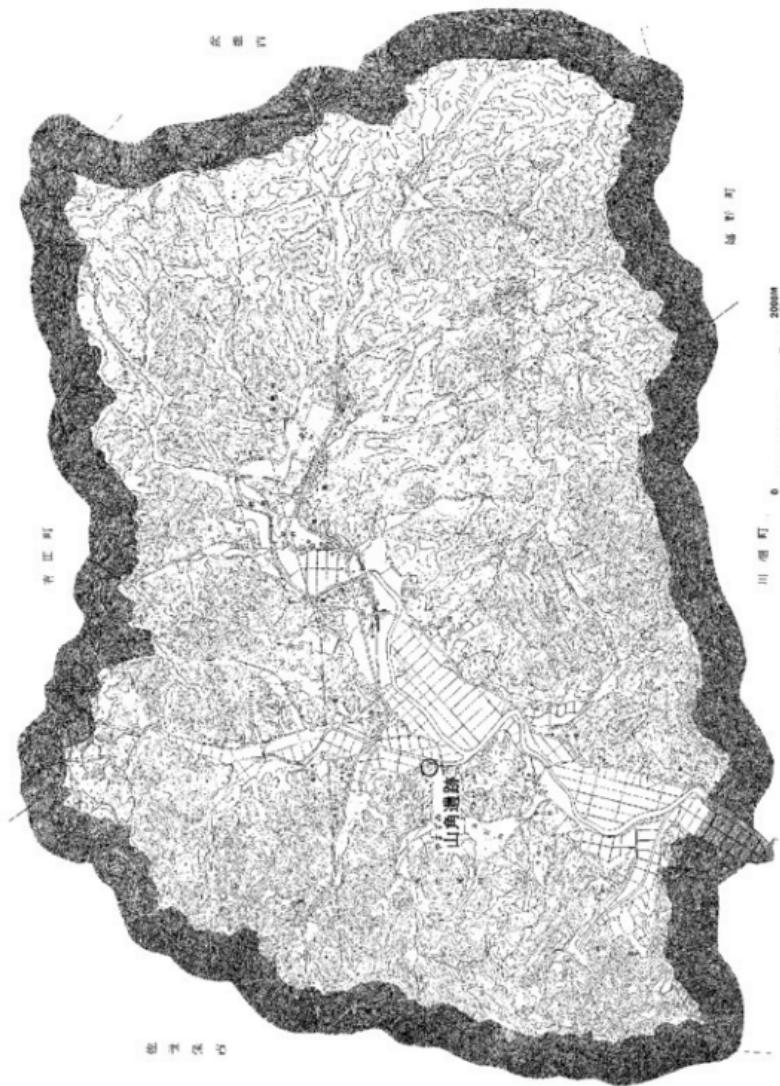


Fig. 2 山角遺跡位置図

しており、これらの街道が集まる地点は「宿場町」が発達して、現在も「宿」なる郷名が遺存している。

一方、山地帯は比較的緩かな北域に対して、南域は虚空蔵山（608m）等の峻険があり、対象的な景観を見せてている。虚空蔵山は名称からもわかるように山嶽信仰が古来あって現在でも諸行事が見られる聖域でもある。この南北域の境界付近は湧水多く、かつ粘土層が発達していて「窯業の町」波佐見をして、街道の要所の地の利とともに発達せしめる重要な要素となっている。いま町内で確認されている近世窯跡は18箇所、その中で畠の原窯跡は県指定の史跡である。県立の窯業試験所があり、町内の職業人口も窯業関係者が多く、波佐見町の自然と位置はこのように、人文界にも強く投影している。

山角遺跡がある位置は、波佐見盆地の西辺に当たり、村木川が波佐見川に合する地点のやや北方500mにある。西背後に標高50mの微高地があり、その山裾から村木川西岸に張り出した三角洲状の低平地にある。梨の木畠が広く営まれているが、かつては甘橘も栽培されたという。当該の地は標高20m程の地であり、このあたりで村木川は急角度に折れ山角橋方向へ流れている。

3. 調査

山角遺跡の調査は、河川変流工事部分における包藏状態の存否、遺跡包藏範囲の確認に直接の目的があり、包含層と包藏範囲が確認されれば全面発掘実施について河川事業主体と再協議をするための資料を整えることに間接的目的があった。このため、調査にさきだら、地元の郷土史家や古老人の知見を聴取の後、試掘調査を実施した。調査対象面積は1.7ha、試掘坑は各2m×2mとし、表面観察の結果に立って、対象地区をT字形に切る線上に9箇所設定した。試掘坑の記号は第3図のとおりA～Iとした。

土層と遺物の概況

各試掘坑の位置によって土層の深度は若干異なるが層順としては共通していた。最上層は耕作土で黒灰色の弱粘質土で縄文式土器・近世陶磁片・黒耀石片等を含んでいる。第2層は弱粘質の黄色土、第3層は黄色の砂質土、第4層は基本的には3層と同様であるが若干の小礫を含んでいる。第2層と第3層の間に青灰色の砂質土を有する試掘坑があったが性格等については明らかでない。

遺物は第1層下面から第2層にかけてであったが陶磁器片や現代の諸物を含んでおり、整層状態の認められる試掘坑はなかった。本来は、第2層が縄文時代中期の遺物包含層であったこ

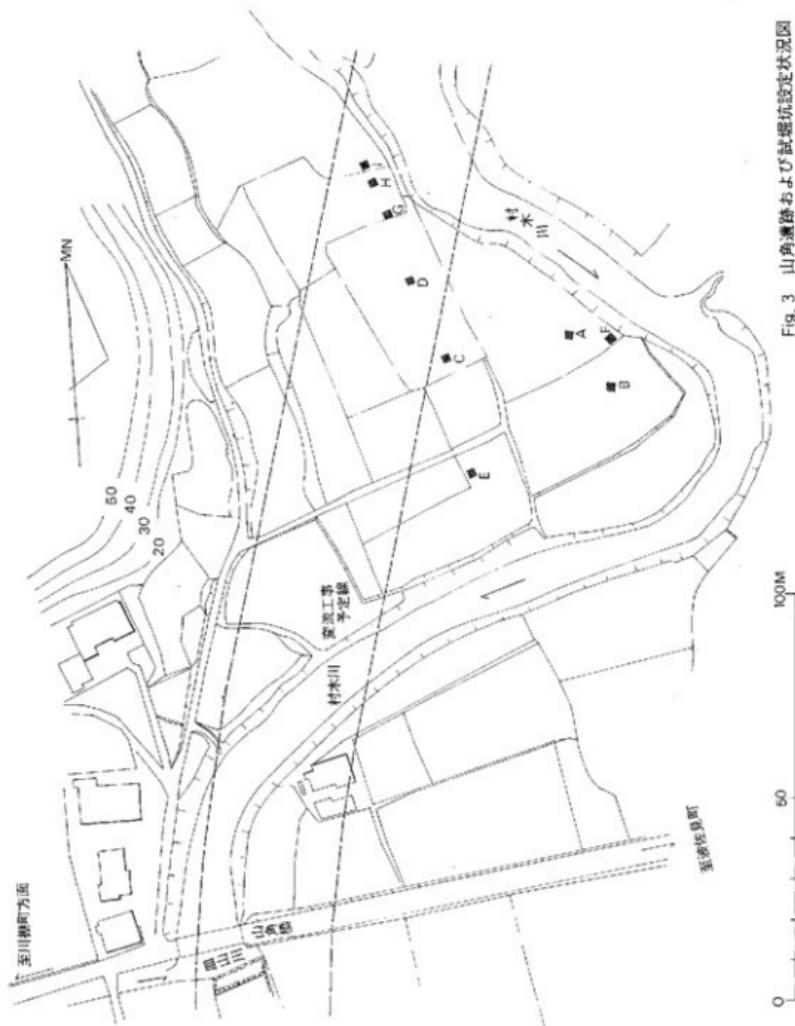


Fig. 3 山角遺跡および試掘坑設定位図

とは確実であるが、戦前からの果樹栽培によって全面的な擾乱がおこったものと考えられ、出土遺物の磨耗と細片化がこのことを物語っている。各遺物については後述するが、現代の諸物や陶磁器片を除けば、すべて縄文時代中期の河高式系統の土器片であり、石器石片は同期の所

産として大過ないと考える。

出土した土器片総数は表面採集資料を含めて 657 点、内訳は試掘坑 A112 点、F524 点、その他の試掘坑 21 点である。石器片の総数は 331 点、内訳は試掘坑 A106 点、F224 点、その他 1 点である。このことから、遺物総数 988 点の 98% が A および F 区において得られたことになり、遺跡は第 3 図の三角洲状の畠地の南端部付近に所在していたことになる。したがって遺跡は小規模のものであり、村木川の水流と後世の果樹栽培によってかなり損壊を受けたことになる。かかる遺跡の状態から得られた遺物群であるが、以下に内容を述べることにする。

土器

太形凹文土器とその系譜下にある土器のみに限られる。提示した資料総数は 49 点である。いずれも小片であり、全器形を窺える資料はなく、便宜上口縁部・胴部・底部にわけて述べることにした。口縁部の細分類については太形凹文の種類と組合せ、土器における施文の部位等によることとし、器形については観察可能の範囲にとどめた。なお、提示した全資料の記号は 1~49 の通し番号とした。写真図版中の番号もこれと符合させた。細分類に当たっては、繩文中期阿高式土器系の標準的分類が確立されておらず、便宜上、坂の下遺跡調査報告書における分類の傾向を参考としたが、かなうしても本稿の分類とは一致していない。

1 類としたのは第 4 図 1~3 であり、口唇部がゆるく波形を描くが山形等の起伏をもたず、施文は太い凹点のみを口縁下際に限って施す一群である。1 は 2 段の太形凹点列を有し、凹点は綫長橢円形である。施文具は太目のヘラ状のものを用いており、凹点の底にはゆるい棱を残している。2 は、1 と基本的に同じ文様構成であるが 2 段の凹点列の下間に凹線 1 条をもつて頭部以下を区切っており、以下はゆるい張り出しの胴部に連なるものであろう。3 は、ややうす手のもので一見無文とも見えるが口縁直下に太い凹点を 1 段配しており、内側には横方向の調整を施している。3 点いずれも滑石末の混入著しいが 3 は黄灰色の胎土で 25~27 と酷似した胎土である。2 類としたのは第 4 図 4~5 である。凹文施文部は 1 類同様であるが凹点と凹線を併用している。ゆるくくびれた頭部、ゆるく張りだす胴部をもつ器形であるが底部は不明である。4 は、ゆるやかな波状口縁をもつが部分的に高く作られた「波形」の直下に凹点とそれをつなぐ凹線がある。さらに 1 条の凹線が頭部を横走し、以下は無文で放置されており、胎土に滑石の混入著しい。5 は、4 とほぼ同様の器形であるが、頭部の凹線は 4 に比して弱く滑石の混入は 4 ほどではない。3 類（第 4 図 6~7）は口縁下際に直線ないし曲線の凹文を描くもので、施文具の幅はやや狭く、ヘラ状のものである。肉厚の器壁は胎土に多量の滑石末を含んでいる。6 は殆んど直立する口縁部であり、7 は口縁に近い頭部から胴部辺である。4 類（第 4 図 8~10）は口縁下際に斜の凹線を連続させている。やや細目のヘラ状施文具を用いており、やや萎縮した感じをあたえる。いずれも肉厚で、胎土に多量の滑石末を含んでいる。8~10 はやや外反する口縁部である。5 類（第 4 図 11~12）は基本的には 4 類に入るが凹線がより萎縮

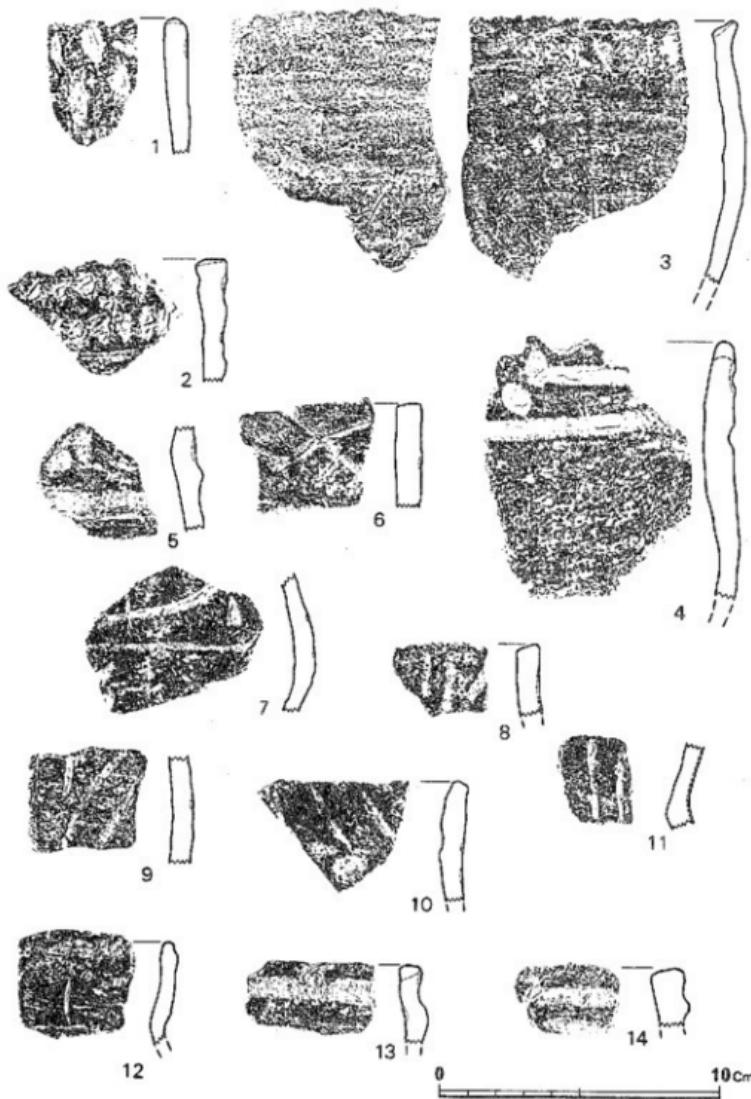


Fig. 4 出土土器 ①

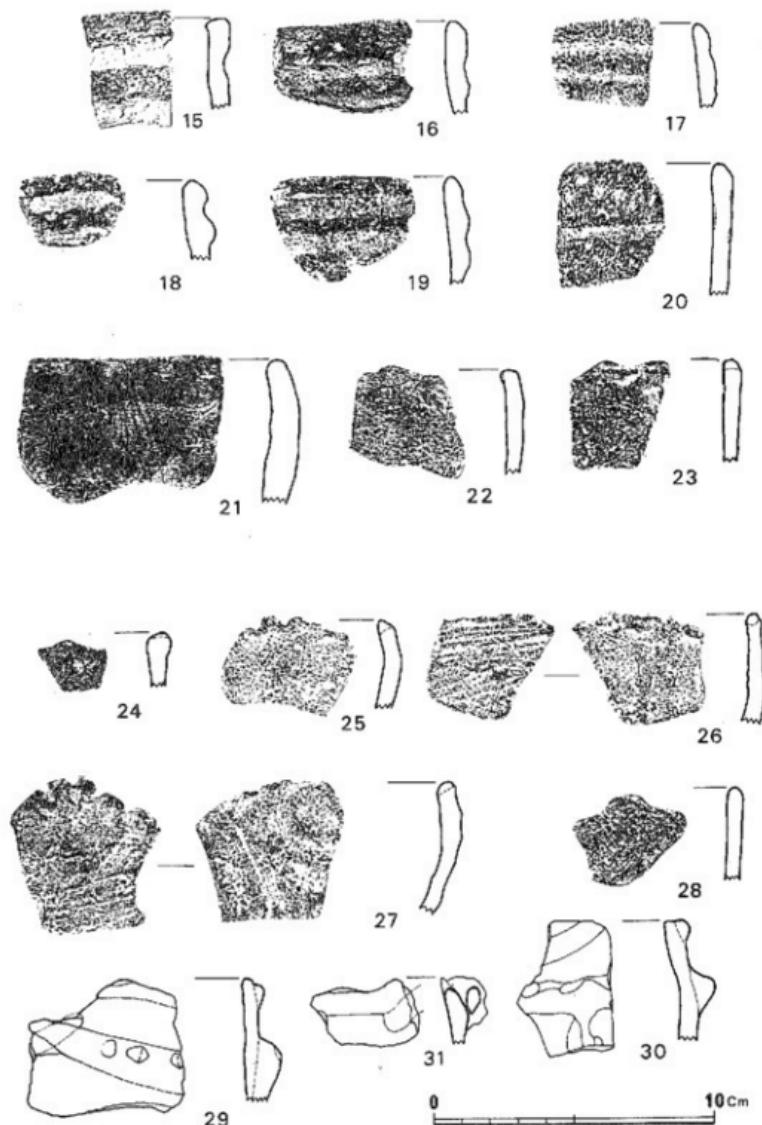


Fig. 5 出土土器②

した感じのもので直立または横走する凹線は不揃いでかつ脆弱な感じをもたせる。11・12ともに頸部から、やや強めに張り出す脣部を推測させる。滑石の混入は共に微量である。6類（第4図13・14、第5図15～20）は口縁部が平縁で、下際に1～2条の太い凹線をめぐらしており、本遺跡の資料では7類とともに最も多い。口縁断面形を見ると、殆んど直立するもの（17・20）と僅かに外反するもの（13・16～18）がある。施文は問い合わせ鈍端なものが使用されている。17・20はいずれもややす手であるが、他は肉厚で胎土に多量の滑石を含んでいる。7類（第5図21～28）、無文のもので、ややす手の口縁部をもつものを一括した。25～28は、うす手で黄灰色の胎土に滑石を多量に含み、ゆるい山形口縁のなかに小さな波形を描いており、内面には横方向の調整痕を残している。24・28はいずれも小規模な山形をもっている。8類（第5図29～31）は、厚い粘土帯ないし粘土紐をもって頸部に重厚な粘土帯を断面三角形にして貼付し、口縁部に複雑な文様を粘土紐によって描いている一群である。29は口縁部と頸部に太い粘土帯をめぐらし、口縁部のそれは丸みをおびて一端を完結させ、頸部の粘土帯は末端を完結させて、X字状に交錯させている。30は29と同一個体と考えられる。31は口縁部貼付の粘土紐を口縁のゆるい波形部でひきはなし、一見把手状に左右から結びつけている。器形としては、頸のくびれは弱く、脣部の張り出しある強度であるが、他類に比して器體がうすく口縁部の装飾性が著しく、滑石の混入は微弱である。もはや阿高系の特色である凹文の伝統をはなれている感がある。32は断面形半丸の凸帶を口縁下に1条めぐらせたものであるが、ゆるい山形口縁を描くようであり、9類（第6図）として分けた。滑石の混入はない。

脣部として提示したのは第6図33～37である。33・34は、第4類口縁部の一部とも考えられ

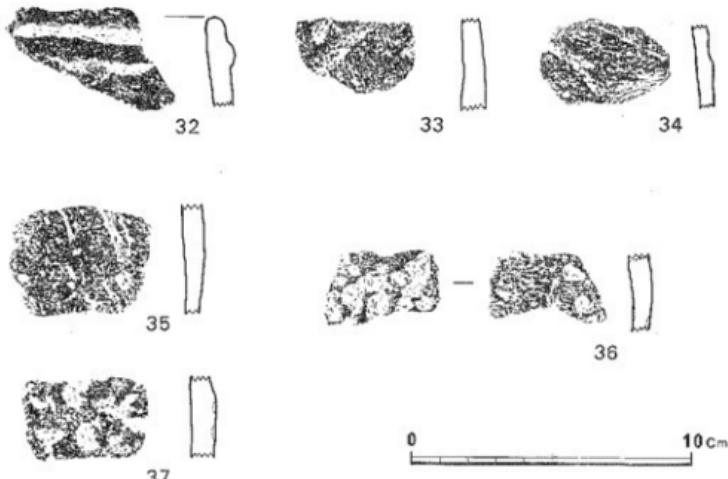


Fig. 6 出土土器③

るもので斜の凹線を見せてている。35も同類と考えられるが、凹線がより萎縮している。36・37は棒状の施文具を器壁に直角にして施文した感じがあるが、不規則であり、整一性がない。37は、海獣の背柱骨を押しつけたような特殊な圧痕を見せており、棒状ないしへラ状の施文具によるものとは考え難い特殊な洞部である。36以外はいずれも滑石の混入が著しい。

底部として得た資料は12点（第7図38～49）である。底部が丸底気味の立上りを見せるもの—1類（48）・底部から強く外反して立上るもの—2 a類（38・42～45）・底部から外傾して直線的に立上るもの—2 b類（39～41, 46・47）がある。底部2類はいずれも僅かに上げ底気味

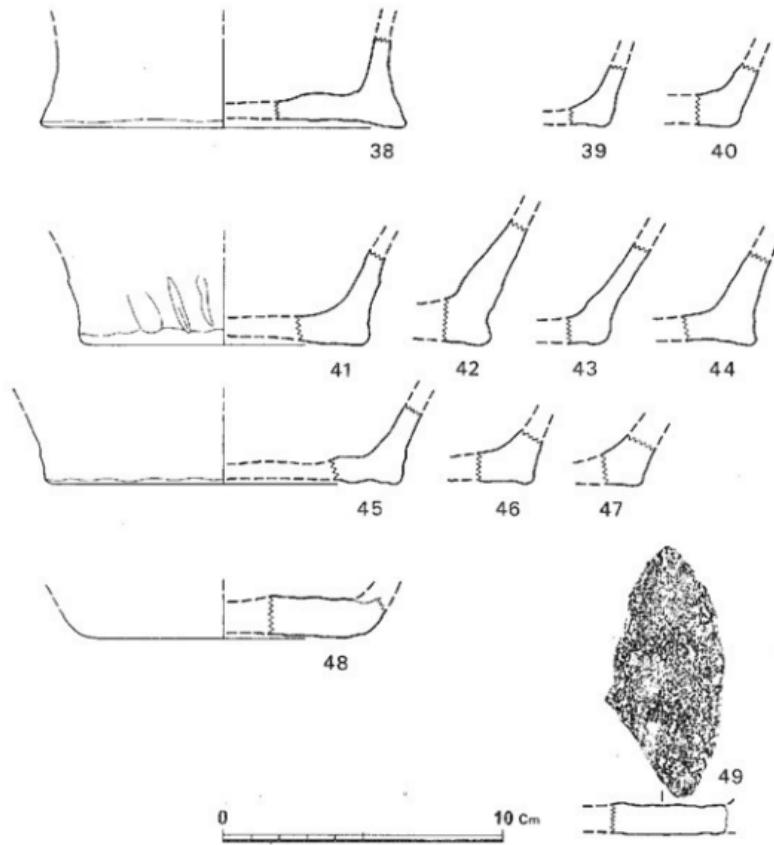


Fig. 7 出土土器④

になっているが、2b類はその点が微弱である。41以外に底部に施文したものはなく、底面にも特に施文はないが49には指頭による整形の痕跡がある。

以上、山角遺跡出土の土器群と概観したが、①胎土には滑石を混入したものが多く、縄文中期土器の特色の1点は首肯できる。②太形凹文の施文部は口縁部下際に限られるものが多く、胴部施文は殆んど見られない。底部においてまた同様である。③凹文には鈍端な棒状ないしヘラ状のものもあるが、細く浅い凹文を施すものがかなりあり、萎縮した感じのものも多い。口縁部に粘土絆を貼付した装飾性の強いものもある。④器形全容を知り得るものがないが頸部のくびれはゆるく、胴の張り出しましゆるやかな深鉢形と口縁部が直立する碗形が多い。以上の点が指摘される。

山角遺跡の中期土器群は、全体としてはいわゆる太形凹文を特長とする阿高式土器の系譜の中で把握できるが、全体として施文に規則性が乏しく、施文部も口縁下際に限られ、かつ萎縮した感じのものが多く、太い棒状施文具や指頭による雄大な文様構成に乏しい。施文具として太い棒状具と認められるのは、1・4・13・16・18・19であり、胴部施文を推測させるのは7のみで、底部施文が見られるのは41のみである。胴部や底部にまで雄大な凹文を有するものは多良山塊では山茶花遺跡（第15図13）があり渦巻状の凹文や横位の「わらび」形と凹点凹線を組むものもある。多良山塊ではないが、字久町長崎鼻遺跡（第15図2）も同様で、貝塚の中からは、先行形態とされる並木式土器も検出されている。山角遺跡の土器群中3・4類としたヘラ施文の土器は、中期土器では新しい方に属すると考えられ南福寺式土器の影響を考える必要があろう。8類とした粘土細ないし粘土絆を貼付した一群も同様であろう。第8類とした無文の一群は、出土例を大多武池遺跡（第15図14）に認めることができる。総じて本遺跡の土器は縄文中期土器の中では新しく、有明海や八代海沿岸地方の影響をうけたものと解されよう。

石器

山角遺跡で得た石器資料は総数331点、本報に提示した石器資料の内数は58点である。58点の内訳を使用材質よりみれば、黒燐石製50点、安山岩質素材8点であり、黒燐石の比率約84%、安山岩質素材16%である。総数331点についてもほぼ同じ比率である。石器の種類別に58点を見ると、石鎚13点（黒燐石13点、安山岩製0）、搔器10点（5、5）、ブレイド19点（19、0）、使用痕のあるブレイド10点（10、0）、石核4点（3、1）であり、安山岩製の良好な縦削ぎの剥片2を提示している。黒燐石の使用率が著しく高く、両石材が同等の使用率を示すのは搔器のみであり、比較的大形の石器を作る場合、九州地方で得られる黒燐石の原石が大形の石器製作にたえる規模のものが少ないと示している。

石器群について略述してみよう。石鎚13点はすべて黒燐石製である。剥片鎚は5点（第8図1～5）、本遺跡で多量に得られた綫長の剥片を素材として製作され、裏面は母核からの剥離面を広く残し、基部の抉入加工と先端を尖らす加工が見られる。表面また同様である。このため、

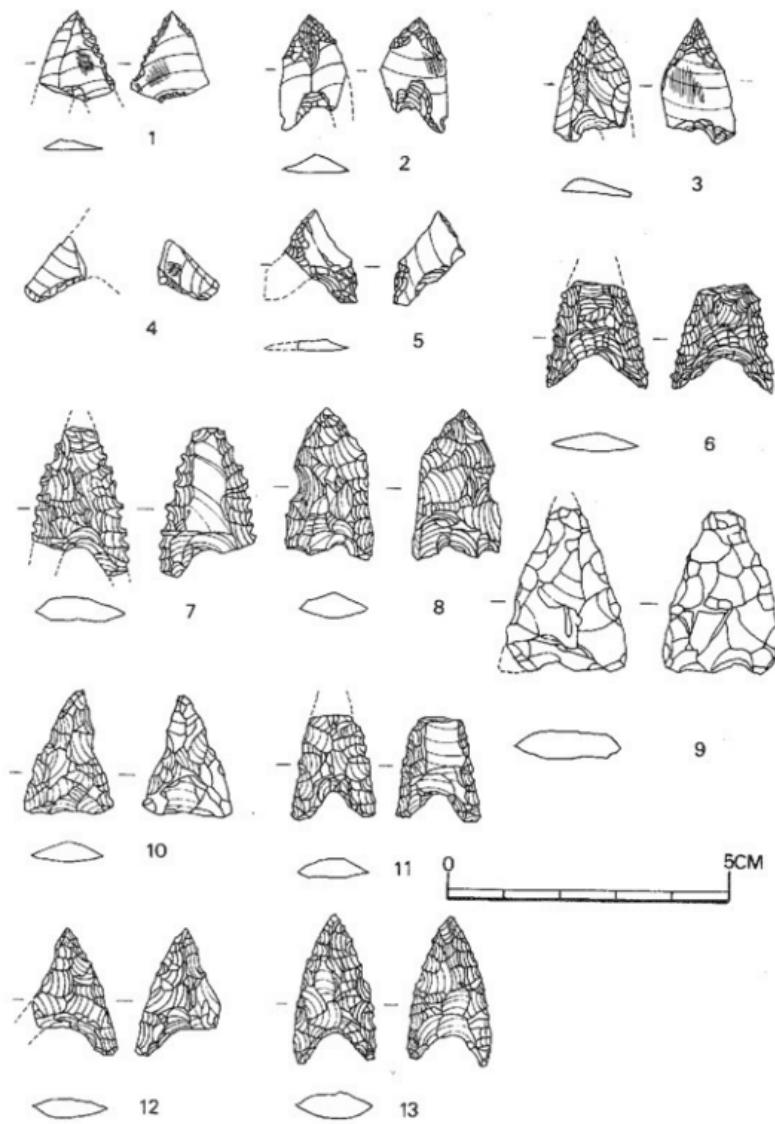


Fig. 8 出土石器①

全体としての形が、将棋の駒の下辺に抉りを入れた形状をしている。全長20mm程度と小形のものが多く、黒色の光沢ある石材を使用している。鎌齒状鐵2点（第8図6・7），基部の抉入加工深く、全打製。いずれも微細な二次加工を全面に施し、両側縁に鎌齒状の加工がある。2点とも欠損部があるが全長30mm程度で削片鐵よりやや大形である。第8図8～13は全打製鐵であるが、8は乳黑色半透明の黒耀石を用い、先端部がやや駒形に近い。9は、本稿石鐵中最大のもので、現存長27mm、基部の抉入ではなく二等辺三角形である。磨耗著しく加工の状態はわかりにくい。10は9と形状ほぼ同様であるが、全長22mmとやや小形である。11～13は、基部抉入が深く、形状は整一である。全長24mm程度で、本稿石鐵の中では中程度の規模である。ブレイド（第9図14～32）19点は、規模の大小はあるが、綫長の整一な剝離技術をうかがわせる一群であり、すべて黒色の良質の素材が使用されている。すべて、表面に1～2系の縦を残し、裏面は母核からの剝離痕をそのまま残している。打撃面は調整されているものが殆んどであるが、一部に自然面を残すもの（15・18・20・22・24・29）があり、母核から早期に剝離されたことを示している。資料の中には、剝離されたままのものがあり（15・18・23・24・26・28・29）、全長は30mmを境にして大小2様があり、7点についていえば15（27mm）、18（47mm）、21（49mm）、23（46mm）、24（30mm）、26（40mm）、28（20mm）、29（36mm）を計り、40mmをこす長大なものが多く、折損した資料についても、原状は長大な削片であったことをうかがわせるものが圧倒的多数を示している。後述する使用痕のある削片についても、ほぼ同様のことがいえる。削片鐵は、この長大な綫長の削片から得たものである。使用痕のある削片10点（第10図33～42）は、ブレイドの両側もしくは片側に刃こぼれの観察される資料群で、前提の長大な資料群を使用している。両側に使用痕の認められるのは5点（34・35・36・39・40）と、片側使用例とが数半ばしている。搔器は总数10点、黒耀石製5点（第11図43～47）、安山岩製5点（第14図48～53）と、数半ばしている。黒耀石製は、幅広の削片を利用したもの（43・45・47）と綫長のブレイドを利用したもの（44・46）とがある。いずれも削片の片側に局部的な二次加工を施している。黒耀石製石核は3点（第13図48～50）である。48は黒色の角礫状原石を用い、打撃面の調整を行った後、剝離を行っており、打撃面とほぼ直角に加撃されている。4枚の削片を剥取ったあとがあり、本稿で前述した綫長のブレイドを剝離している。上面より見れば、剝離も最終段階に近い資料といえよう。49は角礫状の黒色原礫から、幅の広い削片を剝離している。打撃面は調整を行わず、自然面にそのまま加撃している。例数が3点に限られるので速断は避けが必要があるが、掲示した資料に関する限り、綫長の削片を作る石核は打撃面を調整し、幅広の削片を作る石核（49・50）は、自然面に直接加撃していることになる。前者の場合は前述した綫長のブレイドの多數例によって、後者の場合43・45・47の資料（搔器）の打撃面により觀察すれば、少例の石核ながら、2様の石核があることが首肯できよう。

安山岩製石器は8点、内訳は搔器5点（第14図51～55）、櫛剥ぎの削片2点（第14図56・57）石核1点（58）である。搔器5点は、いずれも大形の削片の1辺に二次加工を施しているが、

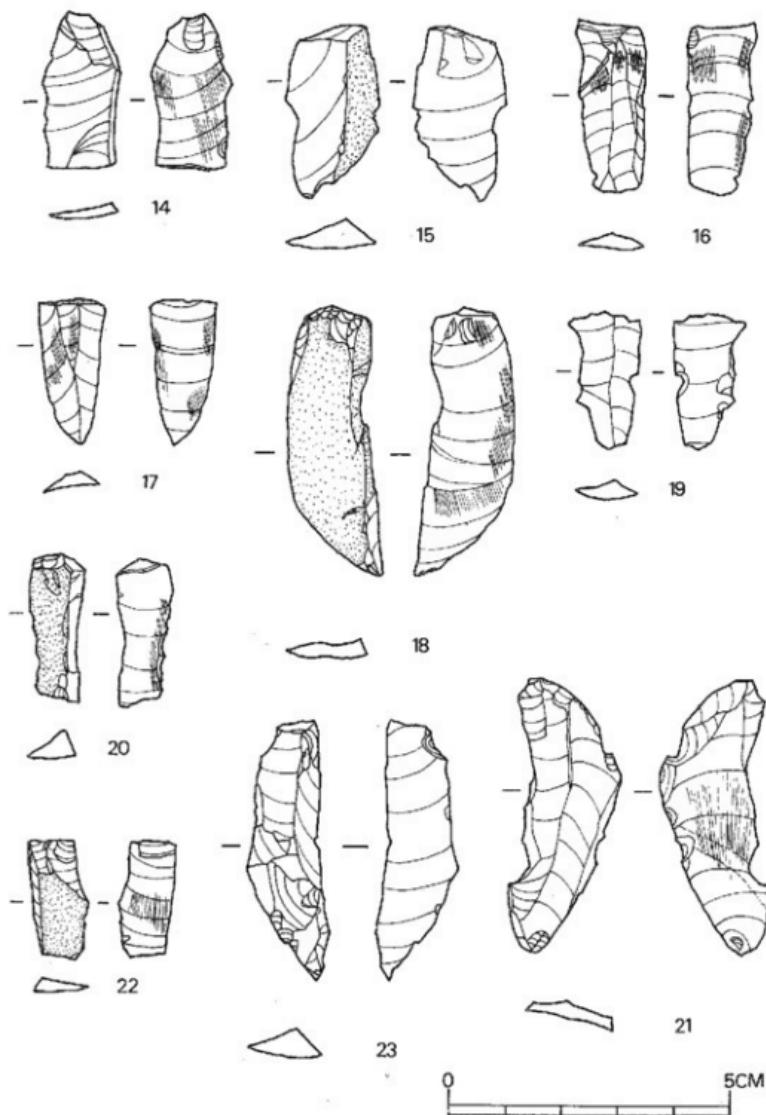


Fig. 9 出土石器 ②

整一な剥片を利用したものではない。本遺跡の安山岩剥片としては、56・57に見る縦剥ぎの剥片があるが、52はこの種剥片の片側に微細な二次加工を施している。二次別工の精緻なものは53であり、両面からの加工が施されている。56・57は縦剥ぎの剥片で整一な形状を見せる。いずれも自然面を残した石核から剥離されており、打撃面と剥離面のなす角度はいずれも 105° 程度である。この剥片を石器に利用したのが前述の52である。58は安山岩製石核であるが、全面にわたって剥離が行われ、56・57等の剥片と直接に結びつく資料ではない。

山角遺跡の石器を概観してみて気づくことがあった。①石器の中で全打製鐵の内、鋸齒状の側縁をもつもの（第8図6・7）があり、從前指摘されていた有明沿岸地域に共通する傾向が見られること。但し、前掲の長崎鼻遺跡（中期）や五島列島諸遺跡やつぐめのはな遺跡（第15図22）等に見られるサイドブレイド状の石鋸や巨大な鋸齒状鐵が見られないこと。⁽⁵⁾②縦長の剥片が石核を伴ってまとまった量の出土があり、幅広の剥片も石核を伴っており、前者の石核と後者の石核は打面調整の有無によって明瞭に区分されること。⁽⁶⁾③石錐や尖頭部をもつ礫器群が認められないこと。⁽⁷⁾④磨製石器を伴っていないこと。以上の点である。

石鋸と称される鋸齒状加工のある剥片石器は西北九州、殊に五島列島など外洋沿岸部の繩文中期～後期遺跡に見られているが、こと鋸齒状の鐵の場合は山地形に立地する遺跡においても認めることができる。鋸齒鐵以外のものは逆に言って沿岸部に限局されることがほぼ確実である。このことは、鋸齒状剥片石器の技術は、繩文中期から後・晩期にかけて西北九州に盛行したことが首肯されるとともに、沿岸部で使用されるものと、内陸部ないし山地形で使用される鋸齒状剥片石器とが、使用目的によって区分されていた可能性が指摘されるものといえよう。沿岸遺跡で見られるサイドブレイド状の石鋸ないし、二等辺三角形の長辺に鋸齒状加工を施す剥片石器、あるいは、前掲つぐめのはな遺跡の安山岩製巨大鋸齒状鐵は、沿岸部での漁撈に強くかかわるものといえようが、内陸部や山地形での使用にも十分な機能を果たすものと考えられる。向後、山地形に立地する遺跡において鋸齒状鐵以外の石鋸が検出される可能性なしとしないが、現時点においては、鋸齒状鐵以外の石鋸出土例の知見はない。かかる鋸齒状剥片石器群の地形による「使い分け」の意味するものは、単に機能の差のみを意味するものか興あるところである。⁽⁸⁾④の点については西北九州沿岸の繩文遺跡において頗著な石器であるが、中期においては浜治遺跡（第15図4）以外に出土例に接していない。近年においては、長崎県のみの遺跡においてであるが弥生時代後期にまで出土例のある遺跡が増加しつつあり、三軒屋貝塚（弥生後期）⁽⁹⁾黒田原遺跡（弥生中期）・今福遺跡（弥生後期）⁽¹⁰⁾で確認されている。かかる現象は、特殊な立地による地域現象と見るか否かは別として、きわめて海洋性の強い石器である点をより強調するものであり、逆にいって、多良山塊繩文遺跡の対象的性質を強調する傍証となる石器であろう。

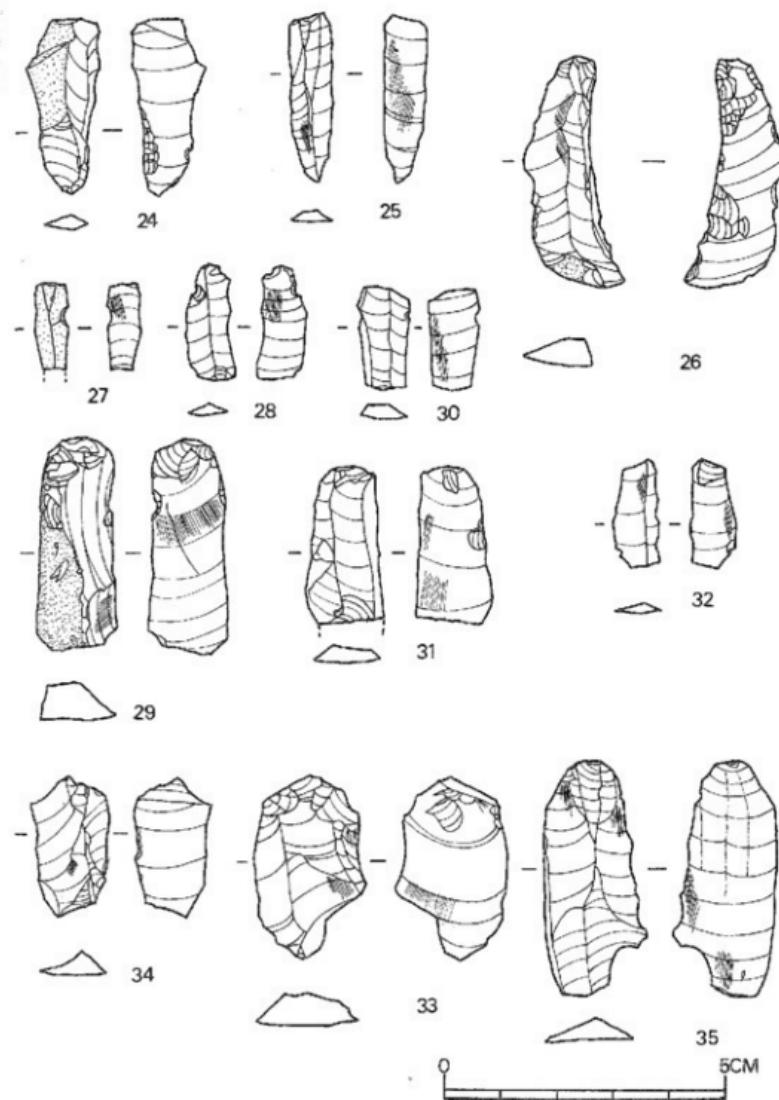


Fig. 10 出土石器 ③

〔参考〕

1. 正林謙「小長井町の先史古代」小長井町郷土誌 1976 小長井町
2. 小田富士雄「五島列島の弥生文化 総説編」人類学考古学研究報告第2号 1973 長崎大学医学部解剖学第2教室
3. 寺師国児「肥後水俣南福寺貝塚—南福寺式土器一」1939 考古学10—7
4. 県教委の分布調査による。
5. 県立宇久高等学校に同遺跡出土の好資料が多く所蔵されている。
6. 正林謙「つぐめのはな遺跡の概要」長崎県考古学会報2 1974 長崎県考古学会
7. 安楽勉・藤田和裕「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報第45集 1979 長崎県教育委員会
8. 松藤和人・諫見富士郎・古田正隆「口之津貝塚（旧称三軒屋貝塚）及び口之津烽火遺跡調査報告」百人委員会埋蔵文化財報告第5集 1975 百人委員会
9. 正林・高野・藤田・安楽・井上「黒田原遺跡」長崎県文化財調査報告第25集 1976 長崎県教育委員会
10. 県教育委員会により、昭和53年以降調査が続行されている。

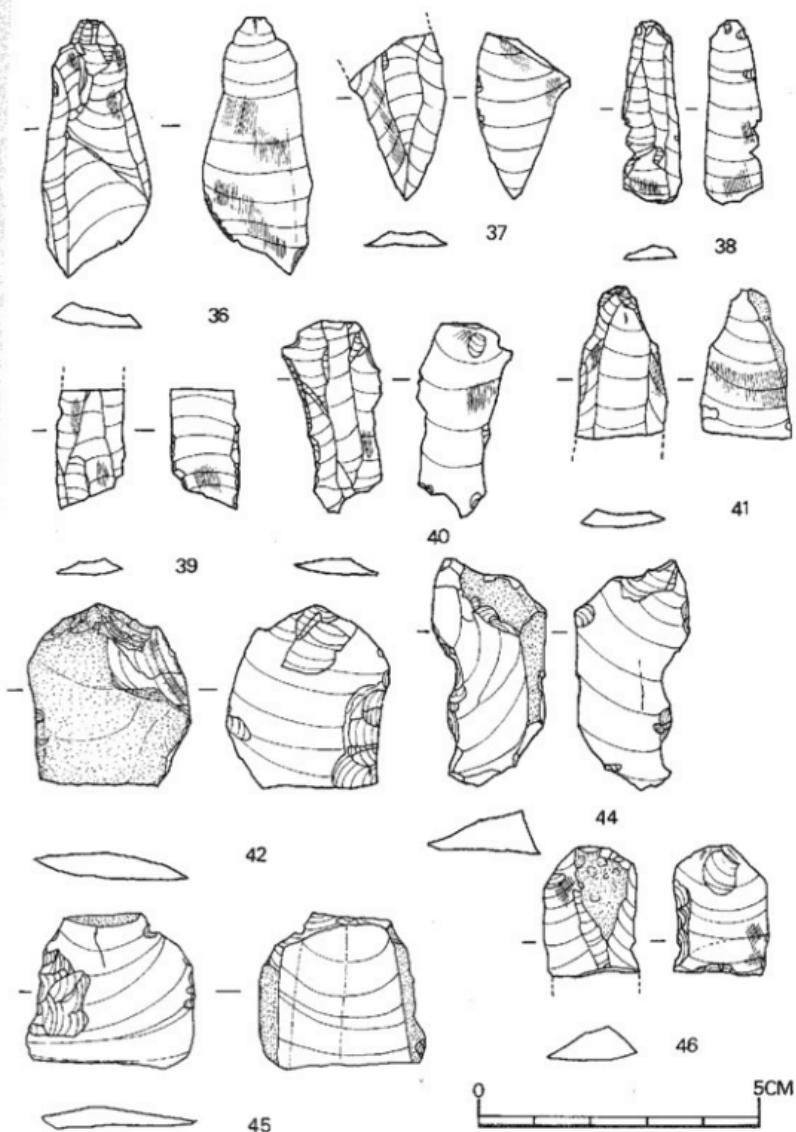


Fig. 11 出土石器(4)

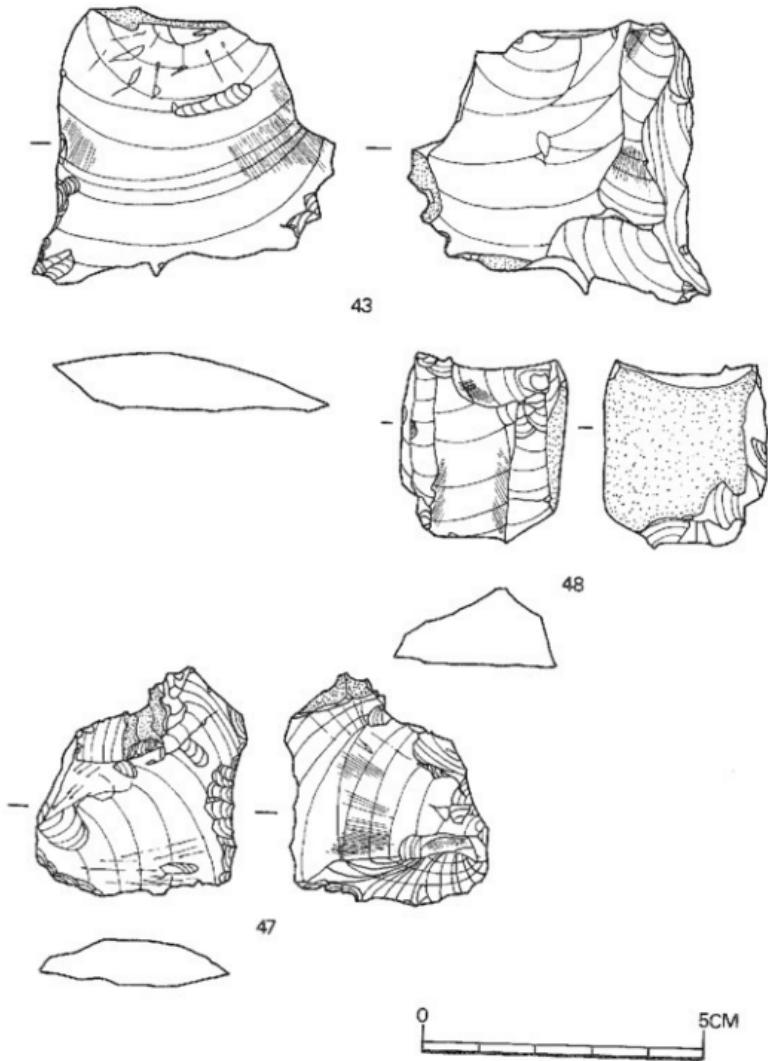


Fig. 12 出土石器 ⑤

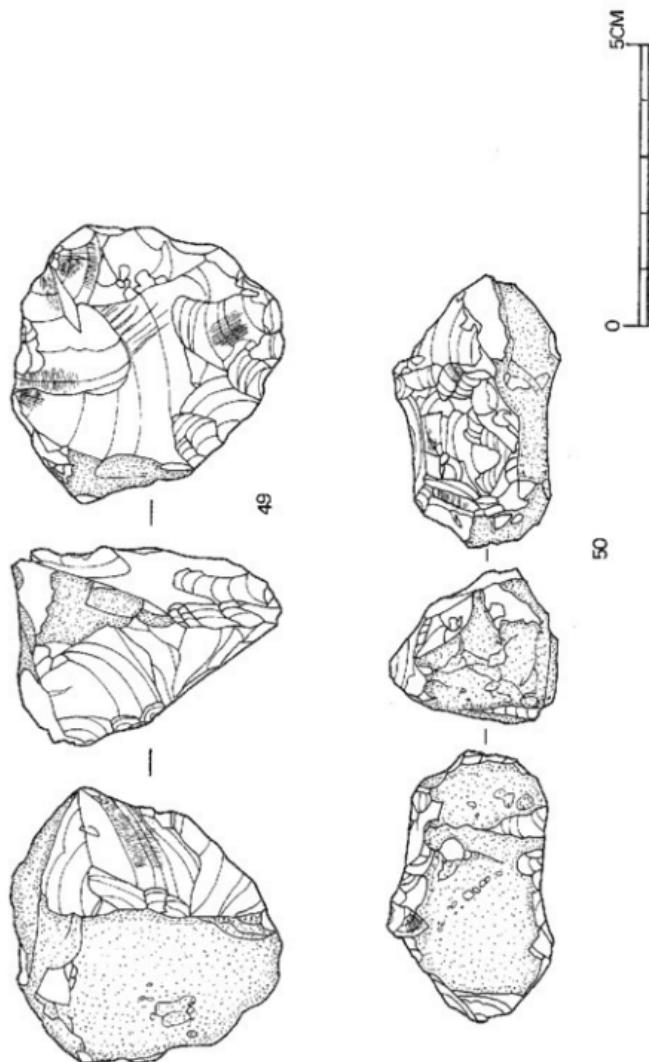


Fig. 13 出土石器 ⑥

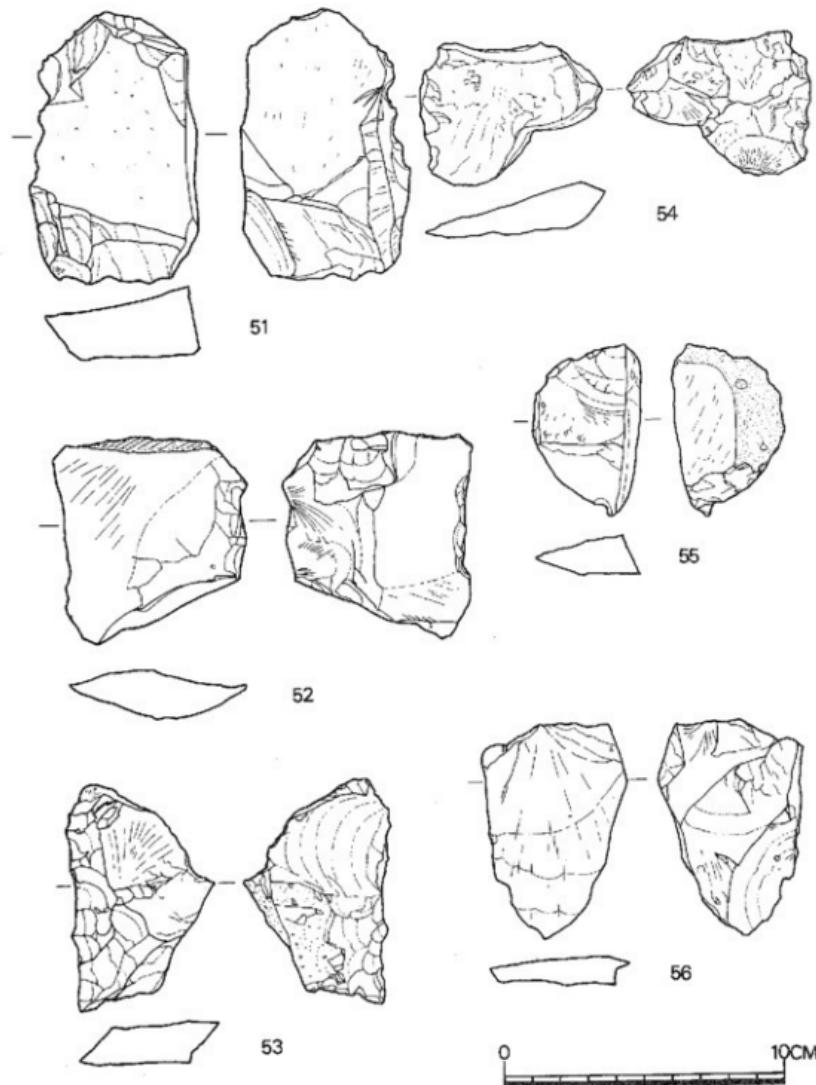


Fig. 14 出土石器 ⑦

4. 多良山塊の 縄文中期遺跡 (まとめにかえて)

長崎県において発掘調査された縄文中期遺跡は数少なく、古くは有喜貝塚(第15図16)があり、西加藤遺跡(同1)・長崎鼻遺跡(同2)・つぐめのはな遺跡(同21)・三会海中干瀬遺跡(同17)・浜泊遺跡(同4)等の海岸部遺跡が調査されている。いずれも、太形凹文土器を出土しており、つとに指摘されてきた鯨の背柱骨の

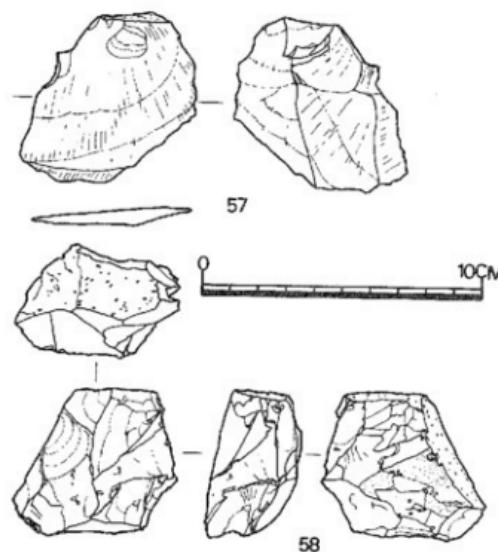


Fig. 15 出土石器 ⑧

压痕を底部に残したものも知られている。遺跡数としては20箇所をこしているが、海岸部遺跡の場合、縄文後期層の下部に遺物があるものの、包含層をもつものが少ないという状態での「出土」状態が指摘されている。この中で前掲の遺跡群は良好な遺跡状態にあり、長崎鼻遺跡では各種の鋸歯状削片石器に大小2類の石鏟が発見され、つぐめのはな遺跡では安山岩製の巨大な銛先状の鉛垂鐵と横形石匙が鯨骨群とともに検出されている。浜泊遺跡では、従前、縄文中期土器に確実に伴った例の稀少な尖頭部をもつ櫻器が伴っていた。いずれも海洋依存の生活形態を強く残すもので、長崎県の離島や外洋沿岸部の実像に迫る遺跡内容であった。

一方、内陸部ないし山間部における縄文中期遺跡の調査は少なく、下本山岩陰遺跡(同23)、岩下洞穴遺跡Ⅱ層以上の包含層(同7)・川頭遺跡(同15)等の例が挙げられる程度である。下本山洞穴では、400点以上の土器資料が得られているが凹文の施文部は口縁下際に施されるものと無文で放置される土器口縁部と底部が目立ち、胴部の少ない点が指摘されているが報文による限り比較的後出の土器のようである。岩下洞穴ではⅡ層以上の各層に阿高系の土器が各微量出土しているが、Ⅱ・Ⅲ層に比較的点数を見るようであり、石器よりもⅡまたはⅢ層の時期に中期遺跡が成立したものであろう。川頭遺跡(同15)ではビーカー状の深いピットの底に大ぶりの中頃土器片と礫群を有し副葬品と考えられる遺構と、小児人頭大の礫による集石遺

構が認められているが、生活遺構は検出されていない。山茶花遺跡（同13）発掘調査を経ていないが小例の先土器遺物と押型文土器を除けば豊富な中期遺物が発見されており、有力な遺跡が包蔵されている可能性が強い。石器では、石礫群と安山岩製の大形搔器と横形石匙が特徴的である。

このように見てくると長崎県における縄文時代中期は、海岸部において遺跡数が比較的多く共伴石器も幾分明らかかなようであるが、内陸部や山地の場合、洞穴遺跡を含めてその実態は明瞭でなく、殊に多良山塊中腹域の高燥地域には遺物出土地は認められるものの調査を経ていない現在では殆んど不明の状態にあるといえよう。但し、中期土器片が見られるのは250~350mの主峰群直下の湧水地に多いこと、横形の石匙（殊に安山岩製の）と、大ぶりの剥片を利用した搔器群が伴うらしいこと、川頭遺跡の例によれば、中期の土壙（墓？）は深いピーカー状になるらしいこと、集石遺構も伴う可能性があるらしいこと、等を今後の調査や研究の参考となり得るであろう。

本報の山角遺跡の場合、資料を提示するにとどまる報文内容とはなったが、対岸の水田地帯等での遺物を今後とも期待することにし、多良山塊の大多武池遺跡（同図14）、川頭遺跡その他の遺跡の精査の機を得たい。なお、本稿中の遺跡名等に関する参考文献等は第1表に記したことを了解されたい。

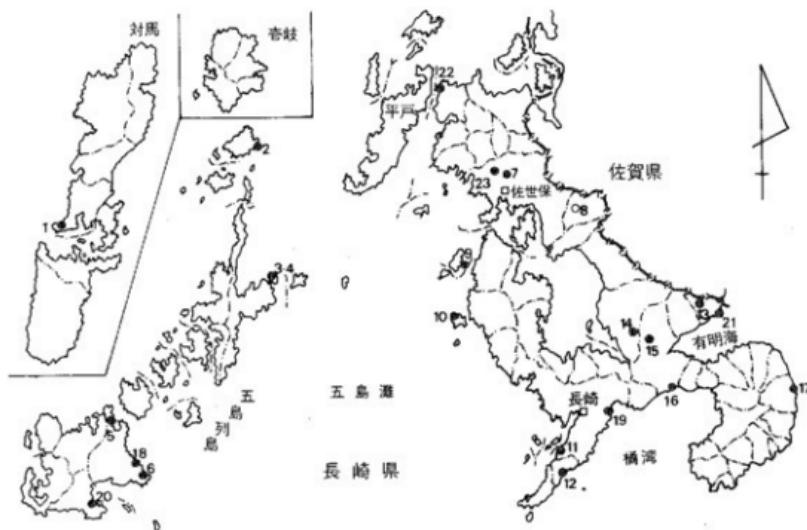


Fig. 16 県内縄文中期土器出土地分布図

第1表 長崎県内縄文中期土器出土地一覧表

No.	遺跡名	所在市町村	文献・参考事項	全国遺跡 登録番號
1	西加藤遺跡	豊玉町	坂田邦洋「西加藤遺跡」長崎県文化財調査報告書第17集 1974長崎県教育委員会	1-52
2	長崎鼻遺跡	宇久町	小田富士雄「五島列島の弥生文化総説編」人類学者古学研究報告第2号 1973長崎大学医学部解剖学第2教室	8-31
3	頭ヶ島白浜遺跡	有川町	内藤芳篤他による調査による	9-8
4	浜泊遺跡	有川町	安楽勉・藤田和裕「浜泊遺跡」長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ 1979長崎県教育委員会	
5	鰐川貝塚	岐宿町	県・町教育委員会の調査(1971)報文未刊	14-8
6	白浜貝塚	福江市	正林謙・安楽勉「白浜貝塚」福江市文化財調査報告第2集 1980福江市教育委員会	16-16
7	岩下貝塚	佐世保市	麻生優「岩下洞穴の発掘記録」1968佐世保市教育委員会	22-98
8	山角遺跡	波佐見町	本報	25-47
9	寺島遺跡	大島町	久原巻二「大島町の古代」1979大崎高校	
10	串島遺跡	大瀬戸町	高野晋司他「串島遺跡」1980電源開発株式会社・長崎県教育委員会	
11	深堀遺跡	長崎市	内藤芳篤他「深堀遺跡」人類學考古学研究報告第1号 1967長崎大学医学部解剖学第2教室	29-62
12	為石遺跡	三和町	篠崎天民氏の表面採集による	32-304
13	山茶花遺跡	小長井町	正林謙「小長井町の先史・古代」1976小長井町誌	28-5
14	大多武池遺跡	大村市	県教委の踏査による	28-2
15	川頭遺跡	諫早市	諫早市教育委員会の調査による。報文未刊	28-22
16	有喜貝塚	諫早市	浜田耕作他「肥前国有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌41-1・2 1926	30-30
17	三会海中千瀬遺跡	島原市	古田正隆「島原市の海中千瀬遺跡」1974百人委員会	31-56
18	水の窪遺跡	福江市	正林謙・高野晋司「水の窪遺跡」福江市埋蔵文化財調査報告書第1集 福江市教育委員会	
19	茂木片町遺跡	長崎市	正林等の現地踏査による	29-65
20	宮下貝塚	富江町	内藤芳篤他「宮下貝塚調査報告」図録篇長崎県文化財調査報告書第7集(1968), 解説篇同第9集(1971)長崎県教育委員会	16-19
21	日島遺跡	小長井町	人江光秀氏の表面採集による	
22	つぐめのはな遺跡	田平町	正林謙「つぐめのはな遺跡の概要」長崎県考古学会報2 1974長崎県考古学会	19-94
23	下本山岩陰遺跡	佐世保市	麻生優「下本山岩陰」1972佐世保市教育委員会	22-109

Tab. 1 県内縄文中期土器出土地一覧表

5. 滑石と縄文式土器

九州西部の縄文前期曾畠式土器や同中期阿高式土器の胎土に滑石粒ないし滑石末が混入されているものが多いことはつとに知られており、独特の光沢と滑らかな手触りをしばしば経験している。滑石は爪でもって容易に傷つけられるほど軟かく、かつ劈解性が低いので、弥生時代には、微細な加工のある石錐として加工され、古墳時代の子持勾玉や形代、歴史時代の經筒や仏像の素材としてしばしば登場する。粉末として利用されるのは、縄文式土器の胎土に混入するほか、民俗例として粉末を布にくるみ加熱して湯タンボ同様の用途に用いることが知られているが滑石の高い熱滞留効率が利用されるものである。曾畠式土器と関連ありとされる韓国の土器に石綿が混入され、沖縄県渡具知東原遺跡出土土器に石灰岩末が混入されているのは同じ意図によるものであろうか。曾畠式土器から、アート紙光沢材・シッカロール等の薬剤に至るまで広く長く用いられる理由は、加工の容易さと滞熱性の利用に目的があったと解される面がある。「温石」の名が和夷異に見えるのは滑石のことで現今もこの名で呼ばれている。

この2つの特性を最大限に活用し、量産されたのは「石鍋」であるが、しばしば中世遺跡で出土しており、畿内からグスク時代の沖縄にまで分布出土している。ホゲット石鍋製作所遺跡は1山塊に11箇所の粗型石鍋製作所を擁し、他にも西彼杵半島には10箇所以上の製作所を数えるが、石鍋以外の器物も散見されている。製作所遺跡の年代はC-14測定によれば11世紀前半の値が出ているが、それ以前の滑石「採掘」については確証はいまのところない。

滑石鉱床は長崎県西彼杵半島に広く見られ、蛇紋岩の上盤に厚く付着する変成岩であり、數10cmから1m以上の厚みがある。⁽¹⁾福岡・山口県でも滑石の露頭があり、紀州温石の名も知られているが、知る限りにおいては西彼杵半島の滑石鉱床は最も規模大であり、かつ利用の歴史と規模が大きいようである。

[註]

1. 筆者の実見によれば、渡具知東原遺跡の曾畠式土器に滑石の混入はない。
2. 知念勇氏等の教示による。
3. 正林謙・下川達彌「大瀬戸町石鍋製作所遺跡」大瀬戸町文化財調査報告書第1集 1980
長崎県大瀬戸町教育委員会
4. 本報
5. 鎌田泰彦「西彼杵半島の滑石」 3に同じ。

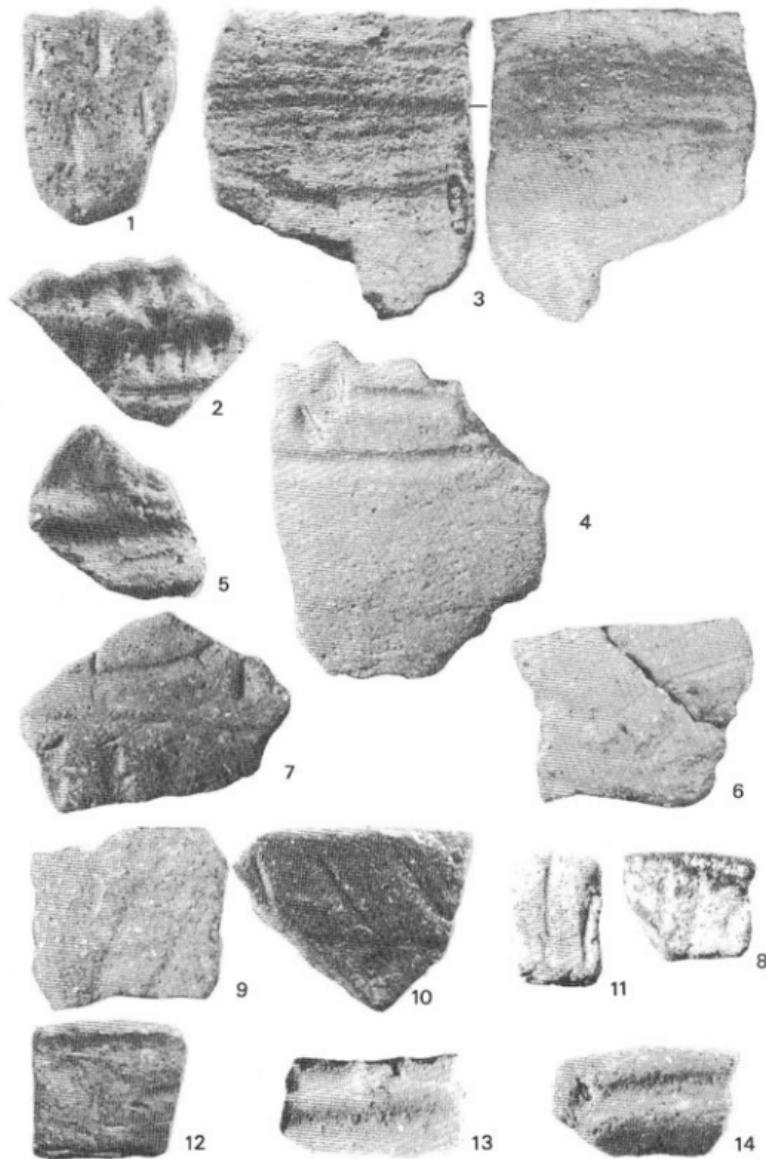
PLATES



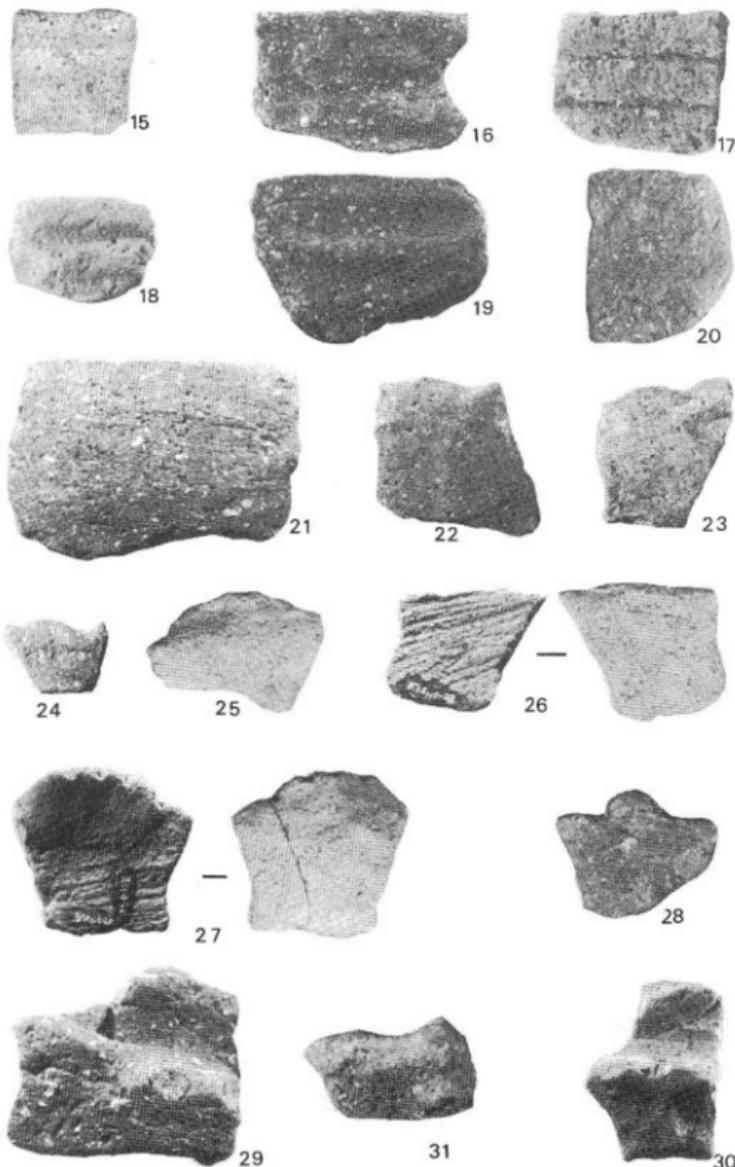
路 滾



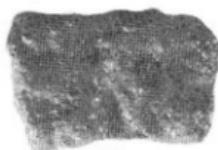
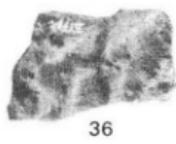
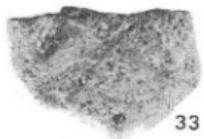
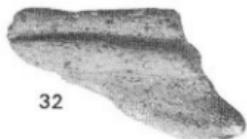
調査風景・土層

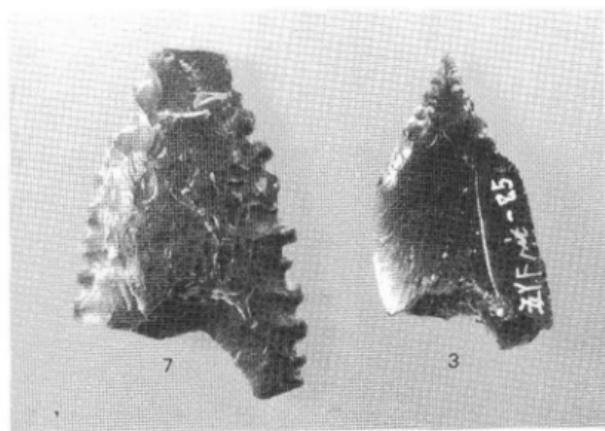
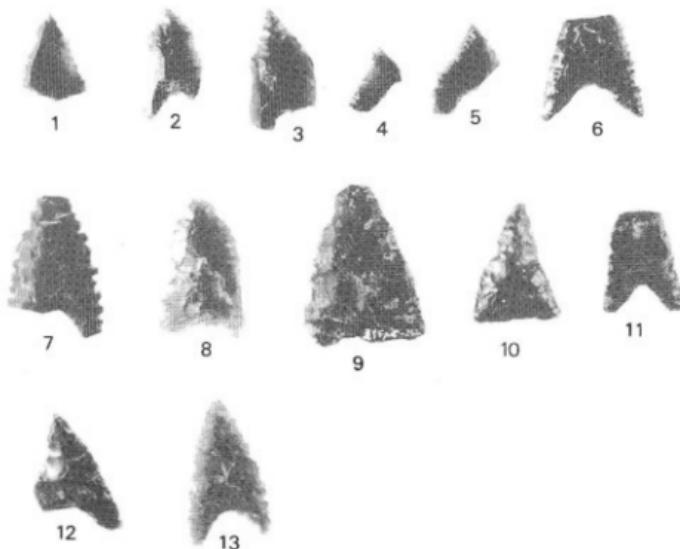


出土土器 ①



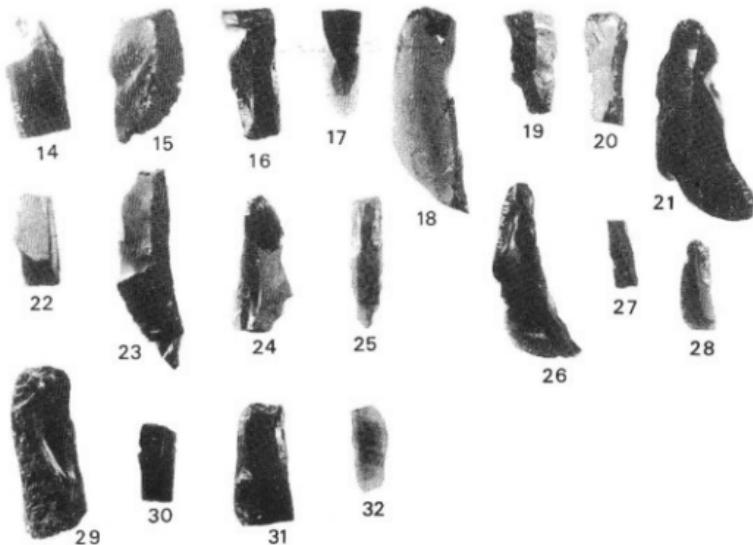
出土土器 ②



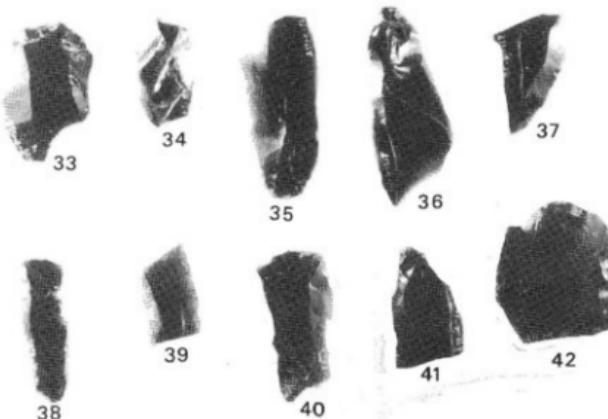


鋸齒狀鏹・剝片鏹 ($\times 2.5$)

剝片石器 ①



縦長剥片 ($\frac{4}{5}$)



使用痕のある剥片 ($\frac{4}{5}$)

剥片石器 ②



45

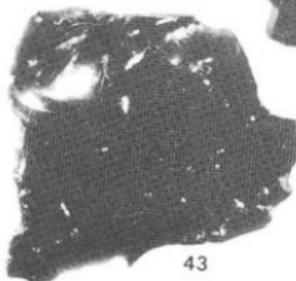


44

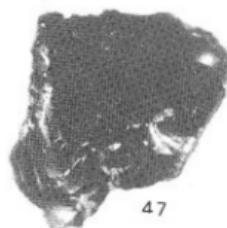


46

器



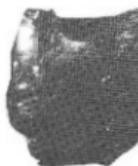
43



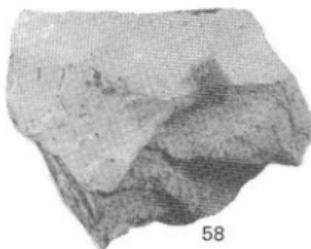
47



49



48

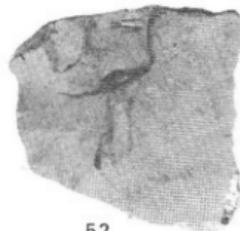


58

石核



51



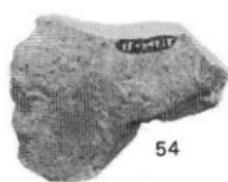
52

器



53

剥片石器 ③



54

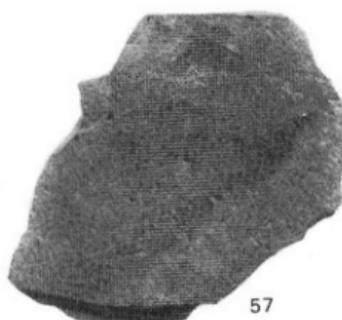


55



刮片

56



57

刮片石器(4)

(付) 滑石製石鍋の炭素測定値

滑石製石鍋の炭素測定値

正林 譲・下川達彌

最近の考古学調査は古代・中世史の研究にも大きな成果をあげてきている。従来まで文献に依存する度合が大きいこの分野も都城あるいは寺院跡などの調査は行われていたが、次第に庶民生活の実態をも解明する方向まで進んできた。そのような状況の中で西日本一帯に顕著に眺められる資料の一つとして滑石製石鍋がある。東は畿内地方から南は奄美大島から沖縄に及ぶまでの広い分布範囲を示すこの資料に対する研究は、特に製作目的と使用年代の上で大きな疑問となっていた。

長崎県西彼杵半島の山中にこの石鍋を製作した跡が各所にあり、おびただしい量の未製品や欠損品とともに岩壁面に取り残された粗型品が付着しているということは、古く明治時代から知られていたことである。ところがこれらの製作跡が奥深い山中に存在するところからあまり眼にふれるところが少なく、これまで一部の研究者達が足を踏み入れて資料の採集と確認と観察を行い、石鍋製作の工程を確認・模式化するにとどまっていた。

昭和54年に大瀬戸町教育委員会の事業として町内での石鍋製作跡の詳細分布調査と、その中のホゲット製作跡群の重点調査が実施されたのである。これから述べる年代測定の資料として検出されたたき火跡の炭化物は、このホゲット製作跡群の第6製作跡試掘坑で発見されたものである。

試掘坑は石鍋製作の痕跡を顕著にとどめる壁面（北西壁）に添って5m×幅1mを設け、現地表面下3mまで掘り込んだが大石群のために基盤面までは到達しなかった。発掘での層序はⅠ～Ⅴ層までが確認され、土層内に



ホゲット石鍋製作所遺跡 第6製作跡における「たき火」跡

における腐植土や石鍋資料の混入具合からはⅠ・Ⅱ層、Ⅲ・Ⅳ層及びV層に大別される。この内で石鍋資料を最も多量に含むのがⅢ・Ⅳ層であり、問題のたき火跡はⅡ層とⅢ層の接点で発見されたのであるが、一応発掘での層序ではⅡ層最下部として把握した。

たき火跡は岩壁に接して直径約1.2mのほぼ半円形を呈し、炭化物を中心に周辺の土層は熱によって赤褐色を示していた。炭化物は詳細な観察によると4つの層からできているが、ほぼ同時期に形成されたもので時間差はほとんどないことがはっきりしていた。なおこの層中に製作跡では見られない内外に研磨を実施した石鍋欠損品の出土があった。

今回このたき火跡より採集した炭化物による年代測定についての報告は下記のとおりである。

昭和 55年 3月 28日

協技 基 9084 号

大瀬戸町教育委員会

殿

基日本アイソトープ協会
東京都文京区本郷三丁目28番4号
電話 東京 03(546)7-1-1-1


測定結果報告書

昭和55年3月 日に受取りましたC-14試料 2個の測定結果がてまつたのでご報告します。

当方のコード	依頼者のコード	C-14年代
K-3805	Hog-6	915 ± 70yB.P. (885 ± 70yB.P.)
K-3806		970 ± 100yB.P. (940 ± 95yB.P.)

年代は ^{14}C の半減期 5730 年 (カッコ内は Libby の値 5568 年) にもとづいて計算され、西暦 1550 年よりさかのばる年数 (years B.P.) として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読みの誤差から計算されたもので、 ^{14}C 年代がこの範囲に含まれる確率は約 70 %です。この範囲を 2 倍に拡げますと確率は約 95 %となります。なお ^{14}C 年代は必ずしも真的年代とひとしくない事に御注意下さい。(御希望の方にはこれに関する参考文献を差し上げます。)

この測定結果についてコメントがございましたならば、是非お聞かせ下さいよろしく申し上げます。

測定結果で見る C-14 年代は、誤差の範囲を加えてほぼ西暦 1,000 年代となり、弘長の譲り状一(仁和寺文書)や、土師器での糸底の出現、あるいは遺跡で共伴する大陸系の青白磁、貨幣などから考察した「滑石製石鍋考」(下川 1974)ほかの平安時代~鎌倉時代初期の年代とはほぼ一致するところである。

(文責下川)

長崎県埋蔵文化財調査集報IV

昭和56年3月31日

発行 長崎県教育委員会◎

長崎市江戸町2-13

印刷 (有) S K 印刷

佐世保市山鹿町19-13
長崎市宝栄町18-15